北海道新聞　31年3月20日（朝刊・小樽後志/18面）

都通りの歴史を学ぶ

樽商大講座　商店街理事長招き

都通りの近年の取り組みを説明する鈴木理事長

小樽商科大のグローカル戦略推進センターが地域に学ぶプロジェクトの一環で市内の稲穂二丁目会館で公開講座「商店街のひとに学ぶ」を開いた。都通り商店街振興組合の鈴木創理事長が浮き沈みを経験してきた中心商店街の歩みを講演。商業関係者ら約70人が参加し、活性化の課題などを考えた。

地元の人を招いて地域の現状や課題を聞くプロジェクトの第3弾で、13日に開催。今回は100年近い歴史を持つ都通りにスポットを当てた。

鈴木理事長は1990年代に巨大商業施設の小樽進出が決まり、危機感をバネに都通りで後志の産物を扱うバザールを開いたり、観光客が自由に使えるトイレを設けたりするなど、イベントやサービスに力を入れてきた経緯を説明。「札幌などから来る『近郊客』を大事にしようということも意識してきた」と近年の取り組みを振り返った。

続くパネルディスカッションでは鈴木理事長と都通りで店を営む4人が討議。激増している外国人観光客向けの取り組みや商店街同士の連携を強化することなど、今後に向けた課題を語り合った。

（森川潔）

北海道新聞　31年3月20日（朝刊・小樽後志/18面）

観光地の魅力向上策探る

22日に小樽でセミナー

魅力的な観光地づくりについて考える小樽商科大主催のセミナーが22日午後2時から、小樽経済センター（稲穂2）で開かれる。北海道鉄道観光資源研究会の永山茂代表が「鉄道観光の夢を語る」というテーマで講演。観光振興の研究報告などもある。

このセミナーは樽商大グローカル戦略推進センターの産学官連携推進部門が一年おきに開催している。

今回は旅行会社「日本旅行北海道」で地方創生推進室長などを務め、道南いさりび鉄道の観光列車「ながまれ海峡号」を活用したツアーを企画してきた永山さんが魅力ある観光について講演。同センターの山本真史特命准教授らが「オホーツクでのコンテンツツーリズムの取り組み」について発表し、パネルディスカッションも行う。

定員は80人で、参加は無料。参加申し込みは21日までに同センター☎0134・27・5290へ。

（森川潔）

北海道新聞　31年3月18日(朝刊)

車いすで小樽観光を

樽商大生マップ制作　入りやすい店紹介

小樽商科大の学生が車いすの観光客向けに、小樽中心部のバリアフリーガイドマップ「ぷらっとおたる」を制作した。入り口にスロープがある店舗を紹介し、短時間で小樽を楽しめるモデルコースも掲載。「小樽での観光に不安を持つ人が、安心して市内を巡ってくれたら」との思いを込めた。（前野貴大）

モデルコースも設定

同大の科目「商大生が小樽の活性化について本気で考えるプロジェクト（マジプロ）」を履修する1年生5人が制作。小樽観光協会が協力を呼び掛けた。

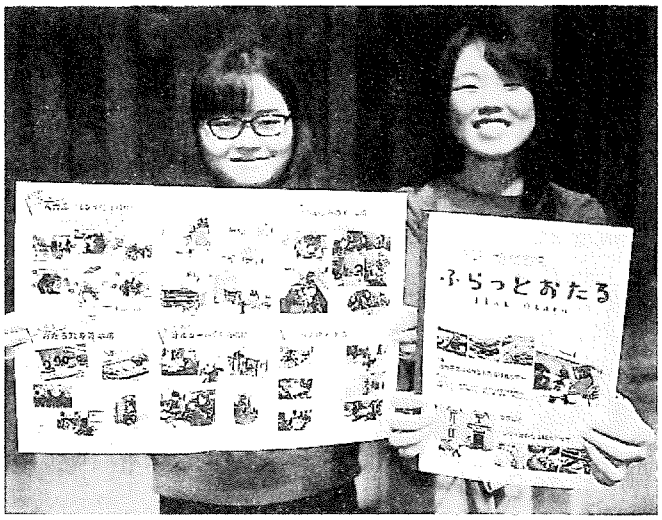
昨年7月から作業を始め、9月には学生が自ら車いすに乗って小樽堺町通り商店街や小樽運河周辺を散策し不便さを調査。12月には市内の福祉関係者や車いす利用者らとマップに必要な情報について話し合った。同大の福士華菜さん(19)は「歩いている時は気にならなかった店の入り口の段差も、車いすでは上がるのが大変だと気づいた」と振り返る。

マップは今月12日に完成した。モデルコースは車いすに対応する人力車での街巡りやすし屋での食事、オルゴール作り体験や洋菓子店、土産品店での買い物を計約4時間半かけて楽しむ内容で、「弾丸ツアー」と名付けた。

このほか、ホテルや飲食店など計30カ所について車いす対応トイレや入り口の段差の有無、通路幅が1㍍以上あるかといった情報を記載。学生が書いたコラムでは「中央通りはロードヒーティングが入って歩道に雪はないが、車道に段差ができている」と注意を呼び掛け、車いす利用者の冬道での悩みも紹介した。

学生と同協会が計6千部用意し、JR小樽駅や小樽運河プラザ内の観光案内所などで配布する。

小樽市も市内全域のバリアフリー対応施設を案内するマップを制作し、ホームページで公開している。小樽観光協会の永岡朋子さんは「樽商大生のマップは楽しめる場所が詳しく分かり、車いすを使う人が喜ぶ内容」と評価した。同大の西淵千歩さん(19)は「まだまだ小樽はバリアフリーになっていない。これをきっかけに取り組みが進み、誰でも観光を満喫できるようになれば」と語った。



小樽商科大生が制作した観光客向けのバリアフリーガイドマップ